



森?外「魚玄機」論：「倡家女」の魚玄機

著者	王 晨野
雑誌名	人文論究
巻	71
号	2
ページ	1-22
発行年	2021-09-20
URL	http://hdl.handle.net/10236/00029783

森鷗外「魚玄機」論

——「倡家女」の魚玄機——

王 晨 野

一、はじめに

「魚玄機」は大正四年七月七日に脱稿し、七月一五日発行の『中央公論』第三〇年第八号に掲載された鷗外の小説であり、「安井夫人」(『太陽』、大正三年四月)の次に女性を主人公にして描かれた歴史小説でもある。

大正三年「安井夫人」執筆前に、鷗外は『青轡』同人であった尾竹一枝の執筆依頼を受け、雑誌『番紅花』の創刊号に「サフラン」と題する文を発表した。それに対して、金子幸代氏は「安井夫人」の主人公の佐代と尾竹一枝をはじめとした「新しい女」の共通性を論究した⁽¹⁾。鷗外と「新しい女」論の延長線として、「魚玄機」に関する多くの先行研究は主に平塚らいてうと性欲生活について論じていた。例えば、尾形怱氏はらいてうと魚玄機の生活の軌跡の類似性を二点指摘した。

らいてうは、初めての恋人、「生田長江のきもいりで作られた閨秀文学会での講師として知った長江の友人森田草平」に「男のひとへの欲求『性欲』をもっていないか」と聞かれた時、「性欲というもののあることは知識

では知っているけれど、自分自身のなかにはまだないからよくわからない」と答えた。この経緯は魚玄機と詩の師温飛卿の友李億との物語に似ている。

「らいてうに尾竹（後、富本）一枝という同性愛の女性があり、大正三年一月、らいてうがその相手の女性と別れて画家奥村博史のもとへ走った」。このことは魚玄機と采蘋の物語に類似している。⁽²⁾

そして、尾形氏は以上の論点を踏まえ、「作者の関心が、事の経緯よりも、より多く玄機の女としての性と文学への開眼の過程の追跡にかかつて」おり、小説「魚玄機」を「女性版『キタ・セクスアリス』だといつてもよい」、「新しい女」らいてうの「歩いた道」の投影が見出されるとまとめた⁽³⁾。また、岡村あずさ氏は、「狂信的、盲目的な魚玄機」が破滅したことを描いた鷗外は作中で才女を見守っている温飛卿に化し、下り坂になっていく「新しい女」たちへの寓話を提示した⁽⁴⁾と論じた。

その一方、「魚玄機」は魚玄機に関連する中国の逸話を下敷きにして書かれた小説である。鷗外は「魚玄機」本文の最後に、執筆のために使った資料を魚玄機一〇冊、温飛卿一八冊、重複を除いて計二四冊を列挙した。しかし、そのような膨大な資料について、山崎一穎氏は、鷗外は『唐女郎魚玄機詩』の附録「太平廣記」を底本として、それに載っていない記事を「三水小牘」、「北夢瑣言」、「唐才子傳」並びに魚玄機の詩数篇から取捨選択し、組み合わせ、魚玄機伝を構成し、「『舊唐書』」（『新唐書』）を基として、「全唐詩話」、「唐詩紀事」、「桐薪」、「玉泉子」から記事を取捨選択し、それらを組合せて温飛卿伝を構成した」と、鷗外が実際に『唐女郎魚玄機詩』と『温飛卿詩集箋注』二冊しか参考にしていなかったと指摘した⁽⁵⁾。

前述したように、「魚玄機」に関する研究は主に二種類に集中している。一つ目は歴史小説としてジェンダー論の視点から研究するものである「魚玄機」を女性の性と文学の覚醒をめぐる現代的な意味に肉づけた研究である。二つ

目は歴史小説研究の視点で、鷗外が実際に参考した史料を論証した研究である。しかし、いずれも魚玄機が女道士になつたことが覚醒の触媒であるのを看過したと言わざるを得ない。また、鷗外は『老子』、『莊子』などの道教経典を読み、幾つかの文章にも引用した⁽⁶⁾が、道教全体に対する理解を示したものが少ない。したがって、「魚玄機」は鷗外の道教理解を表す重要な一篇とも言えよう。

本論は以上の問題意識をもって、典拠となつた『唐女郎魚玄機詩』、『温飛卿詩集』を再検証した上、「魚玄機」における鷗外の道教理解を分析しつつ、このような魚玄機像を作り上げた意図を明らかにしたい。

二、「里家女」と「倡家女」

鷗外が「魚玄機」文末に挙げた資料は以下のものである。

其一 魚玄機

三水小牘

南部新書

太平広記

北夢瑣言

統談助

唐才子伝

唐詩紀事

全唐詩（姓名下小伝）

全唐詩話

唐女郎魚玄機詩

其二 温飛卿

森鷗外「魚玄機」論

旧唐書

漁隱叢話

新唐書

北夢瑣言

全唐詩話

桐薪

唐詩紀事

玉泉子

六一詩話

南部新書

滄浪詩話

握蘭集

彦周詩話

金銚集

三山老人語錄

漢南真稿

雪浪齋日記

溫飛卿詩集

鷗外が挙げた参考資料を見てみると、魚玄機のみとされたのは『三水小牘』、『太平広記』、『続談助』、『唐才子伝』、『全唐詩（姓名下小伝）』、『唐女郎魚玄機詩』の六冊、溫飛卿のみとされたのは『旧唐書』、『漁隱叢話』、『新唐書』、『桐薪』、『玉泉子』、『六一詩話』、『滄浪詩話』、『握蘭集』、『彦周詩話』、『金銚集』、『三山老人語録』、『漢南真稿』、『雪浪齋日記』、『溫飛卿詩集』の十四冊、魚玄機と溫飛卿が共通しているのは『南部新書』、『北夢瑣言』、『唐詩紀事』、『全唐詩話』の四冊である。しかし、参考資料の中で、『桐薪』はとても貴重な本であり、日本では国立公文書館、すなわち旧内閣文庫しかない。また、『握蘭集』、『金銚集』、『漢南真稿』、『三山老人語録』、『雪浪齋日記』の五冊は現存しておらず、現存の古書に引用された内容だけが残されている。鷗外はこの本を見たと考え難い。そして、魚玄機のみとされた『太平広記』、『唐才子伝』、『全唐詩（姓名下小伝）』には溫飛卿の条もある。溫飛卿の参考資料のところに列挙されていないことは、鷗外は執筆する時に恐らく原典の本を見ていなかっただろう。

表二 溫飛卿に関する原典書籍

不明	⑪『雪浪齋日記』	
唐 (六一八～ 九〇七年)	温飛卿 (約八一二～八六六年) ⑫『玉泉子』 ⑬『金筌集』 (温飛卿著) ⑭『握蘭集』 (温飛卿著) ⑮『漢南貞稿』 (温飛卿著)	
五代 (九〇七～ 九六〇年)	⑯『旧唐書』 (九四五年)	引用
北宋 (九六〇～ 一一二七年)	⑰『新唐書』 (一〇四三～一〇六〇年) ⑱『唐詩紀事』 ⑲『彦周詩話』 ⑳『六一詩話』 ㉑『北夢瑣言』 ㉒『南部新書』	
南宋 (一一二七～ 一二七九年)	㉓『滄浪詩話』 ㉔『三山老人語錄』 ㉕『全唐詩話』 ㉖『漁隱叢話』	類似
明 (一二六八～ 一六四四年)	㉗『桐薪』 ㉘『温飛卿詩集』	

(明)の曾益が編集した。⑪～㉗を言及か引用

鷗外の蔵書『唐女郎魚玄機詩』は、葉德輝注、光緒二五年（一八九九年）の本であり、『溫飛卿詩集箋注』は宣統二年（一九一〇年）廣益書局が出版した本である。鷗外の小説「魚玄機」を原典資料と比較してみると、溫飛卿については殆ど原典通りに書かれたが、魚玄機については加筆が多い。また、附録で言及された原典書籍の関係は、表一、表二のようにまとめ、諸原典書籍を右から左へ年代順に整理した同時に、矢印の方向によって二冊の関係を表示した。例えば、魚玄機の逸話に関して、『太平広記』と『続談助』は『三水小牘』を引用、『全唐詩話』は『唐詩紀事』に類似、『全唐詩（姓名下小伝）』は『唐才子伝』を典拠として参考した。溫飛卿の逸話に関して、『全唐詩話』は『唐詩紀事』に類似、『漁隱叢話』は『雪浪齋日記』を引用した。すなわち、各参考文献は関連性が高く、特に小説「魚玄機」の基盤を構築した『太平広記』と『続談助』における魚玄機の逸話が同源であることが窺える。

前表で示したように、「附録魚玄機事略」において、魚玄機に関する物語は『太平広記』と『續談助』の原典が同じ『三水小牘』である。しかし、魚玄機の家柄に関する記述は違う。『太平広記』では「唐西京咸宜觀女道士魚玄機字幼微長安里家女也」と「里家女」で書かれたが、『續談助』では「西京咸宜觀女道士魚玄機字幼微長安倡家女也」と「倡家女」になっている。「附録魚玄機事略」に記録された魚玄機の出身は以上の二箇所だけである。

一方、小説の中に、「魚玄機の生れた家は、長安の大道から横に曲がって行く小さい街にあつた。所謂狹邪の地での家にも歌女を養っている。魚家も其倡家の一つである」と、魚玄機の出身を倡家と設定した。鷗外研究において、魚玄機が倡家の娘ということは特に問題視されていないので、恐らく「長安里家女」と「長安倡家女」を同一視したのでらう。しかし、「里」という漢字は、漢の時代から歴代字典の集大成とされた字典『康熙字典』（康熙五五年／一七一六年）によると、「里、邑也」⁽⁸⁾と書かれ、行政区画の一種である。「長安里家女」というのは、倡家の娘ではなく、長安の町娘という意味だと考えられる。

また、魚玄機がいる咸宜觀について、一八一〇年に出版された唐の時代の都に関する研究書では次のように述べら

れている。

咸宜観は長安の親仁坊の南西部にある。睿宗が親王だった頃の邸であり、玄宗はここで帝位を継いだ。開元初年、昭成（玄宗の生母）、肅明（睿宗の正妻）両皇后の廟になり、儀坤廟と名付けられた。睿宗が崩御した後、昭成皇后は皇廟に移り、肅明皇后はここに残った。開元二十一年（七三三年）、肅明皇后も皇廟に入り、ここが肅明道士観と名付けられた。宝応元年（七六二年）、咸宜皇女がここに入道し、南安邑坊の太真女道士観と名を交換して、咸宜女道士観と名付けられた。南安邑坊の太真女道士観は肅明道士観になった。『名画記』に、「咸宜観には呉道玄、解倩、楊廷光、陳閔の画がある」。『南部新書』に、「長安の士大夫などの貴族の家は、道士になるなら咸宜観に入る」。女道士魚玄機は咸宜観に住んでいたそうだ。⁽⁹⁾（日本語訳は論者による）

名画で彩られ、皇族に深い縁がある咸宜観は貴族が入道する上位候補である。もし魚玄機は倡家の娘なら、咸宜観に入ることが難しいだろう。鷗外は恐らく咸宜観のことを知らないが、『唐女郎魚玄機詩』の資料を見て、「里家女」と「倡家女」から、魚玄機の出自を倡家に設定したと考えられる。

倡家というのは「歌女を養う家のことである。歌女たちに歌や音楽のほか、遊女の仕事もさせることがあり、客を楽しませて金を稼ぐ。魚玄機が詩を学びたいと言いついた時、両親は、「他日此子を揺金樹にしよう」と云ふ願があり、魚玄機のことを歌女と変わらず商品として見ている。魚家は人商売の倡家であるからこそ、人間の価値を金銭で測っており、娘の魚玄機に対しても変わらない。それに対し、魚玄機と温飛卿が初めて会った時、「初め妓等に接するが如き態度を以て接しようとした温は、覚えず容を改めた。さて語を交へて見て、温は直に玄機が尋常の女でないことを知った」と、温飛卿は魚玄機から妓等、倡家という場と異なる気質を感じた。

そして、温飛卿は「江辺柳」の三字を書いて魚玄機の才能を試すと、魚玄機は次の詩を書いた。

賦得江辺柳 江辺の柳を賦し得たり

翠色連荒岸。烟姿入遠樓。 翠色 荒岸に連り、烟姿 遠樓に入る。

影鋪秋水面。花落釣人頭。 影は鋪く 秋水の面、花は落つ 釣人の頭。

根老藏魚窟。枝低繫客舟。 根老いて 魚窟を藏し、枝低れて 客舟を繋ぐ。

蕭々風雨夜。驚夢復添愁。 蕭々たる風雨の夜、夢を驚かし 復た愁を添ふ。⁽¹⁰⁾

第一句から第七句は近くの風景、最後の一句は魚玄機自身の心境である。翠色の柳が多く植えられている岸であるが、「荒岸」という言葉を使った魚玄機は、現在の生活に不満を感じ、風雨の夜に「また愁を添ふ」と、精神の不毛を嘆いている。「兎は不幸にして未だ良師を得ません。どうして近業の言ふに足るものがありませう。今伯楽の一顧を得て、奔蹏して千里を致すの思があります。願はくは題を課してお試み下さい」と温飛卿に指導を願う魚玄機は「良驥を以て自ら比」し、温飛卿を自分の才能を認める伯楽と信じたので、現在の環境において理解者がいないと表した一方、温飛卿の指導で詩の才能を伸ばしたことにより、心が満たせると考えた。精神的な満足を求める魚玄機像が浮かび上がってくる同時に、金銭で人を価値づける両親と異なる価値観で自我の真価を発揮する魚玄機の試みであるとも考えられる。

三、性に目覚めた魚玄機

温飛卿の指導により、詩の勉強をする魚玄機は、「詩名を求める念が漸く増長した」。

玄機は才智に長けた女であつた。その詩には人に優れた剪裁の工があつた。温を師として詩を学ぶことになつてからは、一面には典籍の涉獵に努力し、一面には字句の錘鍊に苦心して、ほとんど寢食を忘れる程であつた。それと同時に詩名を求める念が漸増長した。

李に聘せられる前の事である。ある日玄機は崇真觀に往つて、南樓に狀元以下の進士等が名を題したのを見て、慨然として詩を賦した。

遊崇真觀南樓

觀新及第題名處

雲峯滿目放春晴。

歷々銀鈎指下生。

自恨羅衣掩詩句。

拳頭空羨榜中名。

崇真觀の南樓に遊び、

新及第の題名の處を觀る。

雲峯滿目 春晴を放つ、

歷歷たる銀鈎 指下に生ず。

自ら恨む 羅衣の詩句を掩ふを、

頭を拳げて 空しく羨む榜中の名。

玄機が女子の形骸を以て、男子の心情を有してゐたことは、此詩を見ても推知することが出来る。しかし其形

骸が女子であるから、吉士を懷ふの情がないことはない。只それは蔓草が木の幹に纏ひ附かうとするやうな心であつて、房帷の欲ではない。玄機は彼があつたから、李の聘に応じたのである。此がなかつたから、林亭の夜は索莫であつたのである。

前記の詩は魚玄機が科挙で合格した進士たちの名を見て書いた詩である。この漢詩について、鷗外が参考した『唐女郎魚玄機詩』巻末の「附録魚玄機事略」では、「觀其志意激切，使作男子，必為有用之才。識者頗賞憐之」^(四)と、志と才能を持つ魚玄機に対して、有識者はもし魚玄機が男子として生まれてきたら、必ずその才能を生かせるだろうと憐んだ。「玄機が女子の形骸を以て、男子の心情を有していたことは、この詩を見ても推知することが出来る」と温飛卿に師事して詩の才能を極める魚玄機の心情は、「口吻は男子に似ていた」十五歳の少女魚玄機と変わらないように見える。しかしその後、鷗外は「吉士を懷ふの情がないことはない」と、魚玄機の心情を意図的に男子を思う情にすり替えていく。「蔓草が木の幹に纏ひ附かうとするやうな心がある」から「李の聘に応じ」、房帷の欲ではない「から」、「林亭の夜は索莫で」ある魚玄機は、男子のように科挙を通して詩名を高めることを諦めざるを得ず、蔓草のやうに李のやうな「吉士」の力を借りて詩名を高めることを考えているのだらう。温飛卿に師事したことにより、魚家という「荒岸」から離れようとした魚玄機は、求めたい詩名のために、「男子の心情を有」するから男子を思う心情に変化したことが窺える。

その後、魚玄機は咸宜觀に入り、道家の中氣真術を修行したことにより、性に目覺めた。

当時道家には中氣真術と云ふものを行ふ習があつた。毎月朔望の二度、予め三日の齋をして、所謂四目四鼻孔云々の法を修するのである。玄機は道るべからざる規律の下にこれを修すること一年余にして忽然悟入する所が

あつた。玄機は真に女子になつて、李の林亭にゐた日に知らなかつた事を知つた。これが咸通二年の春の事である。

「氣」という概念は元々『老子』で提起され、陰陽の二種類の氣が万物を生じて和を成す理想な状態を推奨することである。しかし、中氣真術というものは、『老子』や『莊子』のような道教經典に記録されたのではなく、仙術と道教をまとめた晋代の著書『抱朴子』^{ほうぼくし}に書かれ、作者の葛洪は道教の陰陽理論から、男性が女性から陽を採り、女性が男性から陰を採り、氣を増すために房中術を唱えた。

また、鷗外が描写した中氣真術に類似の表現は唐の時代の「笑道論」という文章にある。

三十五、道士の合炁（論者注…「炁」は道家が使う「氣」の変体字）の法のこと

『真人内朝律』にいう。「真人がいわれた。すべての男女は、月のついたちと十五日がやってくると、あらかじめ三日の齋を行い、私室に入り、師のもとに出かける。功德をたてて、陰陽ならび進み、昼夜の六時にわたつて……」。このような猥雑な言葉は耳にするわけにはゆかぬ。（中略）

臣は笑つていう。臣は二十歳のとき、道術にあこがれ、道觀で学んだ。まず黄書合炁の術、三五七九男女交接の道を教えられた。（男女が向き合つて）四つの目と二つの舌が正対し、道の実践のかなめは丹田にある。実践するものは、厄をはらい、寿命をのばすのだとか。夫に妻を取りかえさせ、ただ肉欲のみを第一とする。父や兄が前に立っていても羞恥心もなく、みずから中炁真術と称している。今日の道士は常にこの方法を行つているが、こんなことで道を求めるとは、なんともよくわからない点がある。¹²⁾

この「笑道論」という文章は、道教を貶し、仏教を持ち上げる傾向が全体的に窺えるため、大淵忍爾氏は次のように指摘した。

所謂る護教家の記述には往々にして相手側をことさらに誣うる傾向があつて、必ずしも十全の信用を置き難い場合が多いが、男女合気之術を房中術の一展開と見ることはおそらく議論があるまい。房中術は漢書芸文志では神僊と並んで方伎の一種とされ、独立して取扱つてゐるが、抱朴子に至ると明らかに仙術の一つとされてゐる。⁽¹³⁾

房中術というものは、漢の時代（紀元前二〇二―二二〇年）では医学の一種として扱われたが、晋の『抱朴子』に至つて、仙術として扱われ、道教と融合しようとした。唐時代に房中術は男女の修行の一環として使われていただろう。

しかし、唐時代に房中術が存在したとは言え、道教の修行と言い難い。小説で「唐の代には道教が盛であつた。それは道士等が王室の李姓であるのを奇貨として、老子を先祖だと言い做し、老君に仕うること宗廟に仕うるが如くならしめたためである」と書かれたように、唐の時代において、道教と道士が優位に立つてゐる。王永平氏は、唐の時代の道士は政府に認証されなければならないが、認証されたら、徭役、税金、兵役が免除される。もし道士を辞めたら、戸籍が宗正寺に入り、皇室、王室の待遇が得られると、唐時代の道士の待遇が非常に高いと指摘した⁽¹⁴⁾。その一方、九六一年出版の古書『唐会要』では、八二一年の法律において、道士になりたい人は道教經典『老子』と、『度人經』か『黃庭經』のいずれかを暗記すべきであるということが記録されていた⁽¹⁵⁾。つまり、教育が受けられる貴族や富裕層以外は、道士になることが難しい。

また、王永平氏は唐時代の道士の実態について、「道士の待遇が高いと同時に入道する条件が厳しいので、国の認証がない道士、女道士が存在する。このような偽道士、偽女道士は名義上が道士となっているが、道士観で生活しておらず、道教の規律も受けていない。道教経典では、このような人たちを「在宅道士」と呼ぶ」⁽⁴⁶⁾と、国に認証された道士観で生活する道士、女道士以外に、認証されずに道士を自称する在宅道士が存在すると述べた。おそらく、道教と仙術と医学を融合した中気真術という修行はこの在宅道士たちが修行していたのだろう。魚玄機は咸通元年、八六〇年に、皇室と深い縁がある咸宜観に入った。そして、魚玄機は詩人であるので、道教経典を暗記した国認証の女道士と見てもよからう。魚玄機は咸宜観で中気真術の修行をしたことが考えづらい。

そして、鷗外が参考した「附録魚玄機事略」に、魚玄機は緑翹と客の関係を疑い、緑翹に問い詰めたことに対して、緑翹は以下のように言った。

（引用者注…緑翹）曰、「鍊師欲求三清長生之道，而未能忘解珮薦枕之歡，反以沈猜，厚誣貞正，翹今必斃於毒手矣，無天則無所訴，若有，誰能抑我疆魂。誓不蠹蝨於冥冥之中，縱爾淫佚。」⁽⁴⁷⁾

緑翹は、魚玄機は道士でありながら、男女の情を忘れることができず、罪のない自分に濡れ衣を着せたと叱責した。この記述から見ても、魚玄機は咸宜観で中気真術を修行することが不可能である。この一文を読んだ鷗外も当然に知っているはずであるが、「魚玄機」の世界において、鷗外は意図的に伝統的な道教から離れ、仙術、方術、民間信仰に偏った道教を選んだのだろうか。

では、鷗外はなぜ中気真術が修行できそうな道教世界を作ったのであろうか。

「魚玄機」において、最初に「趙が道書を授けると、玄機は喜んでこれを読んだ。此女の為には経を講じ史を読む

のは、家常の茶飯であるから、道家の言が却つてその新を趁ひ奇を求める心を悦ばしめたのである」と、道教の知識を一心に勉強する純粹な魚玄機は、仙術、方術を取り込んだ中氣真術の修行を通して「真に女子にな」り、初めて情欲を知った。ここで注意しなければならないのは、「当時道家には中氣真術と云ふものを行ふ習があつた。毎月朔望の二度、予め三日の齋をして、所謂四目四鼻孔云々の法を修するのである」と書かれたように、中氣真術が「魚玄機」の世界で道教の修行法の一つとして正当化されており、魚玄機は「道るべからざる規律」に従つただけとなつていた。要するに、鷗外がこのような道教世界を作つたのは、「李の聘に応じ」たのも詩名のためであり、詩に一心する魚玄機に新しい生の形を合理的に提示するからであるのだろう。

四、魚玄機が求むもの

魚玄機は性に目覺めた直後、同じく女道士の采蘋と「対食」していた。

玄機は共に修行する女道士中の稍文字ある一人と親しくなつて、これと寢食を同じうし、これに心胸を披瀝した。此女は名を采蘋と云つた。或る日玄機が采蘋に書いて遣つた詩がある。

贈隣女

隣の女に贈る

羞日遮羅袖。

日を羞ぢて 羅袖を遮り、

愁春懶起粧。

春を愁ひて 起粧に懶し。

易求無価宝。

無価の宝を 求むることは易きも、

難得有心郎。 有心の郎を 得ることは難し。

枕上潜垂涙。 枕上 潜に 涙を垂れ、

花間暗斷腸。 花間 暗に 腸を斷つ。

自能窺宋玉。 自ら能く 宋玉を窺ふ、

何必恨王昌。 何ぞ必ずしも 王昌を恨まん。

采蘋は体が小くて軽率であつた。それに年が十六で、もう十九になつてゐる玄機よりは少いので、始終沈重な玄機に制馭せられてゐた。そして二人で争ふと、いつも采蘋が負けて泣いた。さう云う事は日毎にあつた。しかし二人は直に又和睦する。女道士仲間では、かう云ふ風に親しくするのを対食と名づけて、傍から揶揄する。それには羨と妬とも交じつてゐるのである。

多くの先行研究が言及したように、采蘋という名の女道士は「附録魚玄機事略」に現れておらず、鷗外の虚構である。魚玄機と采蘋の關係を「対食」と關係づけた根拠として鷗外は魚玄機の漢詩「贈隣女」を引用し、「隣女」を采蘋と設定した。尾形仂氏は「その采蘋が塑像造りの工人と觀を駆け落ちし、そのことが玄機の男を求める心に火をつける契機となつた」⁽⁸⁾と采蘋の物語上の役割を指摘したが、ここで注目しなければならないのは采蘋と魚玄機の接し方である。

采蘋は魚玄機より若いので、「始終沈重な玄機に制馭せられてゐた。そして二人で争ふと、いつも采蘋が負けて泣いた」と書かれたように、気強い魚玄機は采蘋との關係で始終優位にいる。「易求無価宝。難得有心郎」と有心の男が無価の宝より得難いと思つた魚玄機は女の同性愛に転じたと推測できるだろう。また、宋玉は美男子、王昌は「唐

代の詩によく使われる人物で、「結婚前に女の家の東隣に住んでいた男で、金持ちでない男、女の初恋の相手」⁽¹⁹⁾である。小説における「自能窺宋玉、何必恨王昌」は、李を王昌に例え、采蘋を宋玉に例えたと考えられるので、「縦令二親は寛假するにしても、女伴の侮を受けるに堪えない」と李に侮辱を受けたと考えた魚玄機は、現に采蘋がいるので、李を恨む必要がないという意味を持ち、李から受けた侮辱が采蘋によつて消され、李に捨てられた喪失感も采蘋によつて埋められたと考えられる。

魚玄機と采蘋の同性愛について、二人の関係性は詳しく書かれていない。しかし、中気真術によつて性に目覚めた魚玄機は、采蘋との関係において、肉体的な性欲というより、精神的な情愛の心が適切だと言わざるを得ず、性と情を明確に区別していない。魚玄機にとつて、采蘋との関係は新しい人間関係の可能性、すなわち、情愛によつて満足感を獲得するという新しい生の形が提示された。

しかしその後、采蘋が「趙の所で塑像を造つてゐた旅の工人が、暇を告げて去つたのと同時」に失踪してから、客との謔浪に耽つていた魚玄機は心が晴れず、温飛卿に詩を送った。

客と共に謔浪した玄機は、客の散じた後に、快々として楽まない。夜が更けても眠らずに、目に涙を湛へてゐる。さう云ふ夜旅中の温に寄せる詩を作ったことがある。

寄飛卿 飛卿に寄す

堦砌乱蛩鳴。 堦砌に 乱蛩鳴き、

庭柯烟露清。 堦砌庭柯に 烟露 清し。

月中隣樂響。 堦砌月中に 隣樂 響き、

楼上遠山明。 塔砌楼上に 遠山 明かなり。

珍簾涼風到。 塔砌珍簾に 涼風 到り、

瑤琴寄恨生。 塔砌瑤琴に 寄恨 生ず。

嵇君懶書札。 塔砌嵇君 書札に懶し、

底物慰秋情。 塔砌底物か 秋情を慰めん。

玄機は詩筒を発した後、日夜温の書の来たるのを待った。さて日を経て温の書が来ると、玄機は失望したやうに見えた。これは温の書の罪ではない。玄機は求むる所のものがあつて、自らその何物なるかを知らぬのである。

魚玄機は寂しさのゆえに「嵇君懶書札、底物慰秋情」と温飛卿の書を希った。温の返書は恐らく詩の指導だと考えられるが、「失望したやうに見えた」魚玄機にとつて、詩の指導だけでは満足できないだろう。「詩名を求め」、芸術を求めた魚玄機は、「詩名が次第に高くなつた」が、「求むる所のものがあつて、自らその何物なるかを知らぬのである」と詩か、情か、何を求めたいかを迷ひ始めた。すなわち、情愛を内包する生が芸術にとつての意味を迷う魚玄機は、生が芸術を成長させるためのもの意識していないので、彼女の内面における芸術と生が統合できておらず、芸術を目指す一心から、求めるものを見失つた。

ところで、温飛卿はこの時点で魚玄機の詩の変化に気づいていた。

陳は時々旅行することがある。玄機はさう云ふ時にも客を迎へずに、籠居して多く詩を作り、それを温に送つ

て政を乞うた。温は此詩を受けて読む毎に、語中に閨人の柔情が漸く多く、道家の逸思がほとんど無いのを見て、訝しげに首を傾けた。玄機が李の妾になつて、幾もなく李と別れ、咸宜觀に入つて女道士になつた顛末は、悉く李の口から温の耳に入つてゐたのである。

魚玄機の詩に対し、温飛卿は「この詩を受けて読む毎に、語中に閨人の柔情が漸く多」と、情愛によつて変わった魚玄機の新しい詩の形を感じた。魚玄機が李の妾になつた前から彼女を知っていた温飛卿は、魚玄機の人生の顛末を知っている。すなわち、魚玄機の生の軌跡は既に彼女の詩に影響していると考えられるだろう。

魚玄機が逮捕された後、以下のようになくだりがある。

李億を始として、曾て玄機を識つてゐた朝野の人士は、皆其才を惜んで救はうとした。只温岐一人は方城の吏になつて、遠く京師を離れてゐたので、玄機がために力を致すことが出来なかつた。

京兆の尹は、事が余りにあらわになつたので、法を枉げることが出来なくなつた。立秋の頃に至つて、遂に懿宗に上奏して、玄機を斬に処した。

典拠では、「而朝士多為言者、府乃表列上、至秋竟戮之」^(四)、朝野の人士は魚玄機を救おうとしたため、京兆の尹は帝に事情を報告したが、秋になつて遂に玄機を斬に処したと、京兆の尹は魚玄機の判決を決断できなかった。しかし、小説では、「京兆の尹は、事が余りにあらわになつたので、法を枉げることが出来なくなつた」と、魚玄機の才能を惜しむ李億を始めとした朝野の人と対比的に、魚玄機を断罪した京兆の尹が書かれた。緑翹殺しの事件において、才能を惜しむ側と殺人罪で罰する側とで対峙している。最後の魚玄機像が魚玄機の詩才と魚玄機の殺人罪に分か

れたように、芸術家の才能と芸術家の実生活をめぐる生が一体化されていないから、魚玄機は「求むる所のもの」が何か、最後まで分からなかったのだろう。

それと同時に、「帝も宰相も其才を愛しながら、其人を鄙んだ」として書かれた温飛卿は結末に左遷されて死んだ。

此時徐商と楊収とが宰相に列してゐて、徐は温を庇護したが楊が聴かずに、温を方城に遣つて吏務に服せしめたのである。其制辞は「孔門以德行為先、文章為末、爾既德行無取、文章何以称焉、徒負不羈之才、罕有適時之用」と云ふのであつた。温は後に隋県に遷されて死んだ。子の憲も弟の庭皓も、咸通中に官に擢でられたが、庭皓は龐勛の乱に、徐州で殺された。玄機が斬られてから三月の後の事である。

温飛卿が左遷された制辞では「孔門以德行為先、文章為末、爾既德行無取、文章何以称焉、徒負不羈之才、罕有適時之用」と、温の才能と人格の不相応を訴えられた。このことは、魚玄機とも呼応しているだろう。

五、おわりに

魚玄機の詩が小説「魚玄機」全編に何箇所か引用されたように、彼女の生は芸術と区別視できない。少女時代に純粹に芸術に専念した魚玄機は、「中氣真術」を修行する道教世界で性と情が目覚めたことにより、生の体験が豊かになった。しかし、情事を何回も経験した魚玄機は、情に圧倒され、悲劇を招いた。小説「魚玄機」において、芸術家にとつての芸術と生の関係が問われているのである。

また、鷗外は大正四年五月十四日、「魚玄機」を発表した二ヶ月前に、「二人の友」と題する小説を雑誌『ARS』

第一卷第三号に掲載した。「二人の友」では、「私」は知識人のF君が童貞だと知ったので、F君が性欲を制していると判断し、距離が急接近する。その後、一つの言語を深く知るかどうかをめぐる学問観の差異によって、次第に疎遠になっていく。鷗外にとって、芸術家に関する性と情を含む生と芸術の関係が鷗外文学の課題である。

※本文引用…『鷗外全集』第一六卷、岩波書店、昭和四八年二月。

なお、全ての引用は、原則として新字に改め、ルビは省略した。

「附録魚玄機事略」における句読点は引用者が付けた。

注

- (1) 金子幸代、「歴史小説のヒロイン・『安井夫人』——〈新しい女〉とモンナ・ワンナ——」、「鷗外と〈女性〉——森鷗外論究——」、大東出版社、平成四年二月。(初出…『森鷗外『安井夫人』論——〈新しい女〉とモンナ・ワンナ——』、『文教大学国文』第一五号、昭和六一年三月)。
- (2) 尾形仿、「『魚玄機』と『新しい女』たち」、「鷗外の歴史小説 史料と方法」、岩波書店、平成一四年八月、二七八～二八四頁。(初版は昭和五四年二月、筑摩書房より刊行)。
- (3) 注(2)に同じ、二七〇～二七一、二八六頁。
- (4) 岡村あずさ、「森鷗外「魚玄機」論—才女に向けられた二つの眼差し—」、「『国文目白』第五三号、平成二六年二月、一四〇頁。
- (5) 山崎一類、「『魚玄機』論」、「国文学研究」第二九号、昭和三九年三月、一〇八～一一〇頁。
- (6) 例えば、「鷗外漁史とは誰ぞ」(『福岡日日新聞』、明治三三年一月)に莊子の「虚舟の譬」を引用した。
- (7) 葉徳輝注、「附録魚玄機事略」、「唐女郎魚玄機詩」、禮居藏宋臨安府棚北睦親坊南陳宅書籍鋪印本景刊、光緒二五年、一～二頁。
- (8) 『校正康熙字典』、芸文印書館、昭和四八年二月、二九三〇頁。
- (9) 徐松著、李健超編、『増訂 唐两京城坊考(修订版)』、三秦出版社、平成十八年八月、九六頁。(初版…嘉庆十五年(一八一

○年）原文…西南隅，咸宜女冠观。睿宗在藩之第，明皇升极于此。开元初，置昭成、肃明二皇后庙，谓之仪坤庙。睿宗升遐，昭成迁入太庙，而肃明留于此。开元二十一年，肃明皇后亦迁入太庙，遂为肃明道士观。宝应元年，咸宜公主入道，与太真观换名焉。《名画记》…咸宜观有吴道玄、解倩、杨廷光、陈闳画。《南部新书》…长安士大夫之家，入道尽在咸宜。按女道士鱼玄机住咸宜观。

(10) 本論文における魚玄機の漢詩の書き下し文は全て『山椒大夫・高瀬舟 他四編』（岩波書店、平成二八年二月第一九刷）から引用した。以下の注は省略する。

(11) 注(7)に同じ、三頁。

(12) 京都大学人文科学研究所「六朝・隋唐時代の道仏論争」研究班、「笑道論」訳注、『東方学報』第六〇号、昭和六三年三月、五一九、六七七、六七八頁。

原文…三十五道士合炁法。真人内朝律云。真人曰。凡男女至朔望日。先齋三日。入私房。詣師所立功德。陰陽并進。日夜六時。此諸猥雜不可聞說。（略）臣笑曰。臣年二十之時。好道術。就觀學。先教臣黃書合炁三五七九男女交接之道。四目两舌正对。行道在于丹田。有行者。度厄延年。教夫易婦。惟色為初。父兄立前。不知羞耻。自称中炁真術。今道士常行此法。以之求道。有所未詳。

(13) 大淵忍爾、「五斗米道の教法について（下）——老子想爾を中心として——」、『東洋学報』第四九卷第四号、昭和四二年三月、九八頁。

(14) 王永平、『道教与唐代社会』、首都师范大学出版社、平成一四年、一九九頁。原文「唐代实行度牒制度，持有祠部颁发度牒的道士，方为正名道士，获得度牒的道士享有免除徭役、赋税、兵役的特权，而且道士还籍隶宗正寺，享受皇室宗亲的待遇」。

(15) 王溥、『唐会要』、中華書局、昭和三〇年、八六七頁。（初版…九六一年）。原文「長慶二年五月勅諸色人中有情愿入道者但能暗記老子經及度人經灼然精熟者即任入道其度人經情願以黃庭經代之者亦聽宣令」。

(16) 注(14)に同じ。原文「除国家发度牒正式记录在案的出家道士以外，还有很大一部分私人入道的伪道士、女冠。这些伪滥道士、女冠，名义上是出家人，实际上他们既不住在宫观过宗教生活，日常起居也不受戒律约束，道教经典把他们称之为“在家道士”」。

(17) 注(7)に同じ、三頁。

(18) 注(2)に同じ、二七八頁。

- (19) 辛島驥、『漢詩大系 第十五卷 魚玄機・薛濤』集英社、昭和五三年二月第五刷、六〇、六一頁。
(20) 注(7)に同じ、二頁。